それぞれの美しさ

鈴木裕美

今回の応募作品はそれぞれに異なる美しさを持っていたと思う。薔薇と菊のどちらが優れているかと問われても、その答えは結局好みでしかなく、優劣をつけるのはとても難しい。今回の選考会はそのような嬉しい困難さがあった。特に大賞を争った二作品は、どちらの花も良い意味で満開一歩手前の、清らかな美しさがあったと思う。

『それは、満月の夜のことでした』

すみれのような戯曲。すみれの花言葉は、「謙虚」「誠実」「小さな幸せ」。

丁寧に選ばれた素直で美しい言葉で書かれている。不思議で哀しく穏やかな、独自の世界観がとても好ましく感じた。疑問を持ったのは、最後の台詞の前の２ページに渡るト書きである。私は演出家としてこれをどう捉えたらよいか戸惑った。ト書きというより詩であるそれを、どうやって観客に伝えたら良いのだろう。ジェームズ・バリーの『ピーター・パン』を最初に読んだときを思い出す。そこに書かれている何ページにも及ぶ膨大なト書きは、もはやそれぞれが独立したエッセイか、小説の地の文のようだと思った。『ピーター・パン』の上演はおそらく不可能だと思っていたバリーの、思いの丈を全て書いたのだと思う。そしてこの戯曲のト書きも、作者の思いの丈だと思う。しかしこれは「ト書き」なのだろうか？ この位置に、この書き方をすることが最も相応しいのだろうか？

『蛇含草ホテル』

彼岸花のような戯曲。花言葉は「情熱」「再会」「諦め」「悲しい思い出」「死」「永遠の別れ」。

前作でも感じたが、とにかく武田さんの「気味の悪い人」、及び、気持ちの悪い人間関係の造形に感服する。本当に気持ち悪いし、実在を信じられるところが素晴らしいと思う。私は美紀のような人物に実生活では出会いたくはないが、観客席という安全な状態からなら、是非覗き見たいと思っている。ただ今回は、落語の題材を含めた全てのピースが有機的に働きあっていないように感じた。勝手な想いだが、一度ファンタジックなオモシロを控えて、恐ろしい人間関係の不思議にハッキリとフォーカスした戯曲を書いて頂きたい。特別な一輪になると思う。

『川にはとうぜんはしがある』

スイートピーのような戯曲。花言葉は「門出」「別離」「優しい思い出」「永遠の喜び」。

登場人物が皆イキイキしている。作者が愛と批判の両方を、それぞれの人物に対して持っていることが伝わってくる。ボックスステップや、アロワナ、ロッキンホースバレリーナなど、美しく面白いイメージがそこかしこに散らばっているが、それが多少乱暴に、ただ投げ出されている感は否めないと感じる。しかしそれが、こじんまりとまとまらないイキイキした躍動感につながっているとも思う。

何より、自分と価値観の違う娘に対して、「全然知らん女」だと嘆く妹に姉が「陽ちゃん（妹）でも私（姉）でもないモンが出来上がった」ことを「最高やん」「あんたすごいことしたがで」「えらかった」というラストに励まされた。「価値観の違う新しい女を生み出した母は最高だ」という発想は、とても美しい発明だと思う。

『留守』

オレンジ色のキンセンカのような戯曲。花言葉は「静かな思い」「別れの悲しみ」「失望」「寂しさ」。

ホコリっぽく、すえた匂いがする、次の興行先へ移動間近の移動遊園地のトレーラーハウス。その小さな空間に、どこにも行けない孤独な中年の男と女。既視感はあれど、とても魅惑的なしつらえだと思う。彼らの関係性のパワーバランスがささやかでもダイナミックに変化するところを見たかったが、演じる俳優や演出によって様々なニュアンスを引き出せる戯曲だと思う。

『くじらのいびき』

パンジーのような戯曲。花言葉は「私を思って」「もの思い」。

作者がご自身の感じていることに対して、声高にならず、誠実に向き合って書かれた戯曲だと思う。この戯曲にしかない孤独、哀しみが描かれているところが素晴らしい。以前若かった頃、今までにない哀しみの形が現れている若い作家の芝居を観て、「ああ、初めて見る、私たちの話だ」と思った事を思い出す。この戯曲の上演を観た 20 代の方たちも、そのように思ったのではないかと思う。もう若くない私が、私が気がつけない新しい哀しみや傷というのはどのようなものか、気がつかせてもらえること。

若い作家の作品を読んだり観たりする時に、とても期待する点である。

『初心者のための永遠』
　カラーのような戯曲。花言葉は、「華麗なる美」「乙女のしとやかさ」「清浄」。
　実はここまで書いてきて、その戯曲のイメージの花を思い浮かべたら、驚くほど花言葉が合っていたので驚いていたのだが、ここにきて、「華麗なる美」というのはちょっと違うなと思っている。カラーに私が持っているイメージは「孤高の美」「人見知り」。他の花と混ぜてブーケにできないイメージである。作者は非常に賢い方だと思う。深く物事を思索する方だろう。一つ一つのシーンのイメージも鮮烈で美しい。ただ「私、人見知りなんです」と言われているような感覚を持ってしまった。

『たった１人の。』
　ヘリオトロープのような戯曲。花言葉は「献身的な愛」「愛よ永遠なれ」「夢中」「熱望」「誠実」。
　ヘリオトロープは見たことがない。チェーホフの戯曲に出てくるので知っているだけだ。これは花言葉から逆引きした。演劇に対する愛についての戯曲だと思うが、正直に申し上げると、愛があるということしか伝わらなかった。作者の発見した特別な愛を見せていただきたかった。